

LOST MODERN：近代の喪失

Will architecture survive? ― 建築はこの先、生き残れるか

日本国内では近代建築が壊され続ける。20世紀を構築してきた近代建築が瞬く間に跡形もなくなっていこうとしている。国内において建築を安易に壊し続ける社会的な風潮や制度、システム、その暴力を止めるために立ち上がる市民活動や反対運動も実りや成果を得ることが殆どない。この状況は更にこの先の深刻かつ急速に衰退する時代を向かえ、そしてこのままその先へと時代を推し進めた時、未来の風景に近代建築、また建築は生きているのであろうか。

近代はその成長を原動力に「新しい都市」「新しい建築」を創出してきた。その成長は新都市を開発し、新庁舎を建設し、美術館、劇場、図書館、公民館、学校、団地など様々な公共施設が新しく建ち並んだ。一方で私設としてデパート、ホテル、オフィス、観光施設、商業施設など、日常の市民生活と並走する公共性・交流性の高い施設が建設されていった。その後、ポストモダンの潮流が導入され、時代の勢いも後押しし、世界で最も多くのポストモダン建築を輩出し建設された。

そして21世紀に入り、1960年、70年から80年、90年代の建物まで相次いで壊され続け、その動向は止まらない。老朽化、安全性、財政難を主な理由に建築を壊し続け、建築のこれまでの構想と挑戦の痕跡が幻想のように跡形もなく消えていこうとしている。その背後には耐用年数、減価償却、有形固定資産などの制度の問題があり、建築基準法、耐震基準、所有権における法の問題、また機能不全、人口減少、空き家などの社会の問題も覆いかぶさる。短い寿命となった建築、先の見えない時代、それを『LOST MODERN― 近代の喪失』と総称する。

本展では、国内で現実におこる社会的状況を真摯にドキュメントとして国際展で発表する。それは単に近代建築の保存運動を啓蒙することを目的とすることだけではない。ここでは建築の遺産、保存、活用、再生だけに留まらない、建築の未来について知の更新、集合知の形成、社会の前進を行うことを目的とする。これまで建築の創造や構想が議論されてきた一方で、建築の寿命、老朽、終末、解体、放置、忘却といったことは世界各地、各社会でも起こっている。近代とは何か、モダンとは何か、近代化を終えた社会はこの先どこへ向かうのか。これは日本だけの現象ではなく国際的な課題であり、急速な発展を遂げた日本の前例から、各国または各地で起こる日常の問題意識を共有することになるであろう。この数年、一度立ち止まった国際社会が動き出す中、建築国際展を通して、これから先の未来への議題を投げ掛け、この先の未来への改革や改善への一旦を担うことを本意に願う。そしていまを生きる建築の未来、また次世代の建築への希望をつなぐことを目的としたい。

『LOST MODERN：近代の喪失 ― 建築はこの先、生き残れるか』をヴェネツィア建築ビエンナーレ日本館で提示し、その兆しを獲得したいと考える。

LOST MODERN : 近代の喪失

Will architecture survive? ー建築はこの先、生き残れるか

本展では建築のテーマだけではなく、建築におけるテーゼ（命題）を投げかける展覧会：『LOST MODERNー近代の喪失：建築はこの先、生き残れるか』を提案したいと考える。

近代建築は残す必要があるか？

近代建築には寿命があるか？

近代建築は生き残れるか？

これまで建設され壊されてきた近代建築の創生と喪失またはその危機を辿る。

出展作品候補の対象条件は：

- ①国内における20世紀の建築
- ②建築家によって設計された建物
- ③公共建築または公共性を有する規模の建物

①②③の条件を基に現在約150件の近代建築・メタボリズム・ポストモダンの建築が都心部や地方において解体・または解体の危機にある。これらの建築からリサーチ研究とキュレーションを行い本展の出展作品を選出する。



Contents | 展示内容

① Context – 現状

第一章では、展覧会のイントロダクションとして、国内においてなぜ近代建築が壊されるかの現状を伝える。そこには解体に至る背景、耐震、法制度、資産価値減衰などの文脈の理解を促す内容を展示する。また既に解体された、または解体予定にある建物を紹介。また本展において藤井光によるドキュメンタリー映像の制作を行い展示する。

構造・用途	細目	大正7年	昭和12年	昭和17年	昭和22年	昭和26年	昭和41年	平成10年
SRC造・RC造	事務所	100	80	60	80	75	65	50
	住宅						60	47
れんが造・石造・ブロック造	事務所	100	80	50	60	65	50	41
	住宅						45	38
鉄骨造1	事務所	100	80	60	80	50	45	38
	住宅						40	34
鉄骨造2	事務所							30
	住宅							27
鉄骨造3	事務所							22
	住宅							19
土蔵造	事務所	50	50	25	40	35		
	住宅							
木造	事務所	35	30	25	30※	30	26	24
	住宅						24	22
木造モルタル造	事務所					27	24	22
	住宅						22	20

※昭和20年以後の建築は15年

© 耐用年数算定方式

② LOST MODERN – 近代の喪失

第二章では、本展に選出された国内の建築出展作品の模型を制作展示し、ビエンナーレ会期中にオープンからクロージングまでの時間軸に沿って、建築模型を壊していく。(現在、解体の危機にあり存続する作品は会期終わりまで残る)。それはパフォーマンスやセレモニーのような儀式的な意味もあり、反感や痛みを伴う形式ではあるが、実物が壊された関係者の苦痛や悲愴や焦燥感、そこから問題意識や未来へ改革の契機とする意味合いを重要視し、この様な方式を採用する。



©Shinjiro Yamada

③ MODERN Timeline – 近代の物語

第3章では、出展作品に該当する建築の物語を紹介する。建築には構想から、スケッチ、設計図から建設中の現場、竣工式、文章、またその後にひとびとに利用されてきた様子、様々なセレモニー、そして解体への反対運動などの活動、また提案書、それが叶わず、解体されていく建築の姿など、建築が歩んできたそれぞれの物語を写真や資料などを元に調査と研究を重ね展示とする。



©Shinkenichiku-sha

④ Beyond Modernisation – 近代化の先

第4章では、本展における近代化の先の未来に対する来場者の意見や提案を映像録画しドキュメントする。解体の現象が日常の建築（建物の短命さが加速する現状も踏まえ）にも影響を与え、「なぜ壊すのか?」「あなたならどうするのか?」「この先どうしたら良いのか?」など質問を投げ掛ける。建築の国際展を通して、日本で起こる課題を世界と共有し、文化的環境問題を越えた、建築の生命力を問い掛ける議論を企画する。



Exhibition Plan

Exhibition Design | 展示構成

① Context – 現状

展示物：文脈と映像

国内における現状を伝える表現を用い、展覧会の趣旨を伝える。

② Lost Modern – ロスト・モダン

展示作品：建築模型

本展の為に制作された建築模型を展示。
オープン時からクロージングまでの期間を
ひとつの時間軸とし、ビエンナーレ会期中
に模型は壊されていく。また解体予定にあ
りながらも、現存するものは残される。

③近代の物語

展示作品：図面、文書、写真、映像など
ひとつひとつの建物にまつわる物語をリ
サーチし、それを基にナラティブな展示を
構成する。

④近代化の先へ

展示物：映像録画とアーカイブ

展覧会場内にて、来場者の未来への提言
を集める参加型の仕組みとする。

⑤近代遺跡

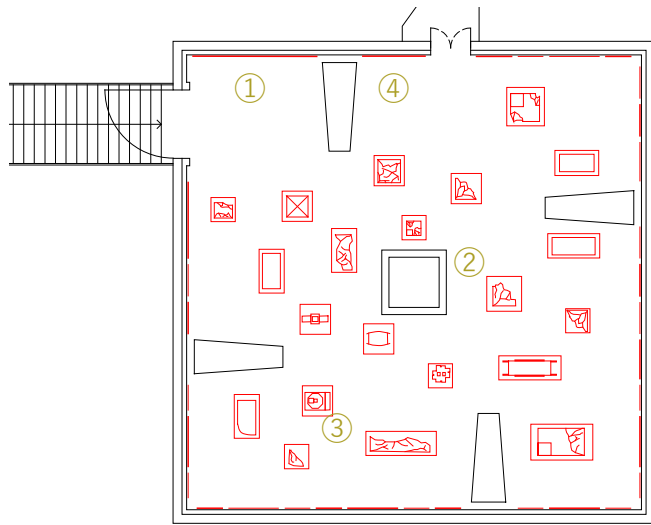
展示物：建物の残骸

ピロティ空間を利用し、石のテラツポの床
に合わせ、解体された建物の残骸を配し
て、近代遺跡として見立てる。

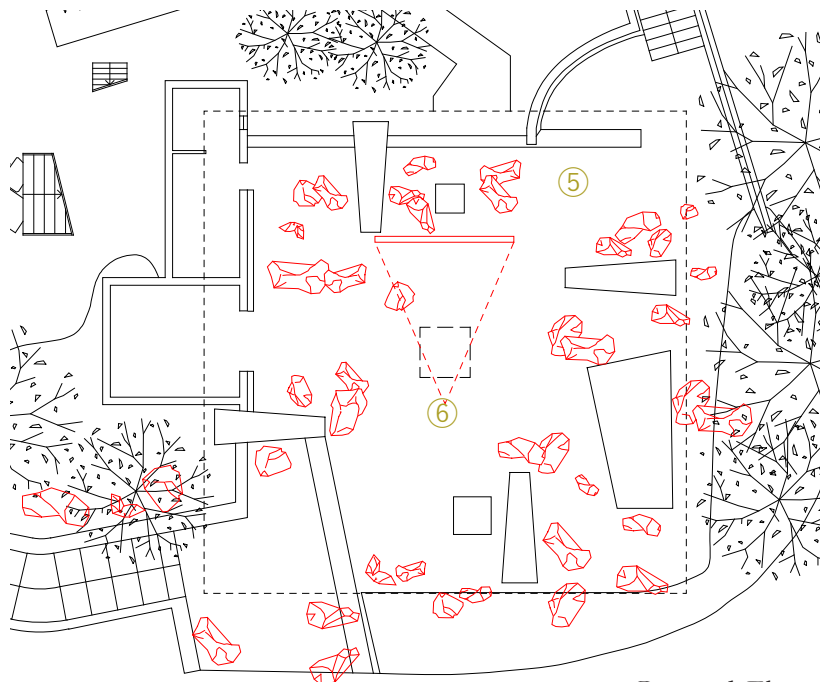
⑥映像スクリーン

展示物：映像

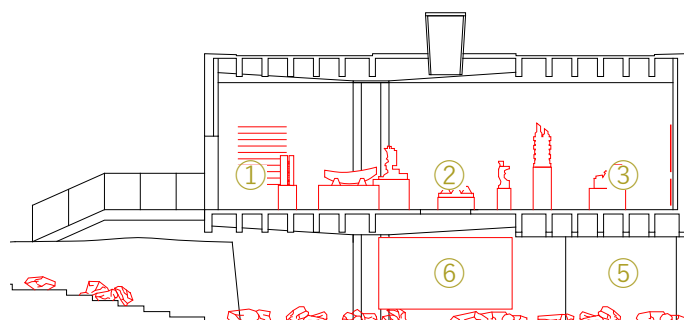
ピロティと近代遺跡の庭を使って、映像閲
覧の場を設ける。同時に会期中は本展の
議題とする近代・解体・保存など、座談
会を開き、各国と共有しながら、近代化の
その先、建築の未来を語る。



First Floor
1/250



Ground Floor
1/250



Section
1/250